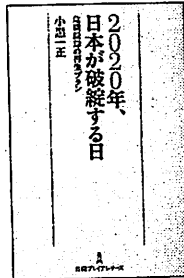


ビジネス



「暗黙の債務」目を背けずに

■2020年、
日本が破綻する日
小黒 一正(著)

金融機関は預金の運用先に困っており、日本国債を大量に買い付けている。それは国債の金利を一段と低下させた。ギリシャ問題を契機にした日本の財政への不安は、表面的にはひとまず後退した。とはいえ、構造的な問題が和らいだわけではない。「日本の財政は実際どうなのか？」という疑問に正面から答えてくれるのが本書である。2007年度の国のバラ

ンスシート(一般・特別会計の合計)をみると、約280兆円の債務超過になっているという。債務超過でも国には「課税権」があるため、すぐには破綻しない。しかし、急速な高齢化に伴う社会保障費の増大が生む「暗黙の債務」を加えると、国の債務超過は約1430兆円に上ると本書は警告する。しかも、「2020年には国の借金が家計貯蓄を食い潰

してしまう可能性がある」ため、「財政破綻のリスクは毎年上昇中」だ。ただし、著者は「いまならまだ間に合うはず」として、包括的解決策(社会保障費の「事前積み立て」等)を提言している。

若い世代、将来世代に、社会保障の負担を押し付けることを、世代会計の専門家は「財政的幼児虐待」と呼ぶ。「世代間格差の是正は成長を促進させる」可能性を持つため、早急な対策が必要だと著者は主張している。財政支出で景気対策を行う場合、将来世代に対する責任も考慮すべきであることが本書を讀むと痛感される。(日経プレミアシリーズ・914円)

加藤 出

(エコノミスト)